

邪馬台国雑感

REV. 2 2026 年 1 月 25 日

我部山民樹

(かべやまたみき)

1. はじめに

(1) 魏志倭人伝

中国の歴史書の魏志倭人伝（『三国志』中の「魏書」第 30 卷烏丸鮮卑東夷伝倭人条の略称）に「約 30 の国のからなる倭国連合の女王・卑弥呼（魏志倭人伝に 247～248 年に死去したとある）が邪馬台国に都をおいていた」と記述されている。

『三国志』は、西晋の陳寿により 3 世紀末（280 年（呉の滅亡）-297 年（陳寿の没年）の間）に書かれ、陳寿の死後、中国では正史として重んじられた。陳寿は倭国を訪問したことが無いので、魏の使者の梯儁（ていしゅん）や張政（ちょうせい）の報告書その他を参考にしたとされる。魏志倭人伝のあいまいさにより、記述の誤りを想定して様々な解釈があり、邪馬台国論争がおさまらず、候補地はすでに 100 を超えており、新たに四国の阿波説（越智正昭著「邪馬台国は阿波だった！」）も出ている。

「邪馬台国は自分たちの地域にあった」という主張は、観光資源や地域振興にもつながるので、学問的な弱点が指摘されながらも、一般社会では一定の支持を集め続けている。先日驚いたことに、私が住む市原市の中央図書館で「邪馬台国は市原にあった！」という書籍を書棚で見た。（「古墳が 3,000 ほど見ついている市原だが、まさかそんなはずはなかろう」と思ったのでそのときには手にはしなかったが、このように多くの邪馬台国説があるようだ。（後日確認すると 2015 年の伊藤邦之著「邪馬台国は上総（かずさ）にあった！」で、全体的に詳細に検証しているようだが、しかし市原市の神門（ごうど）古墳を卑弥呼の墓と比定していて、現在、その可能性を唱える地元の学芸員や地方史家はいないと思われる）。現在は放射線炭素 14 年代測定法で遺跡類の築造年代や遺跡の存在年代が特定されている。新説を唱える時には必ず築造時期を検証すべきである。女王卑弥呼が死去した 3 世紀中期に該当しない遺跡を根拠にする説は邪馬台国候補から除外すべきである。前方後円墳はほとんどが 4 世紀以降のヤマト王権時代に築造されていて、3 世紀中期に築造された円墳や前方後円墳は非常に少ない。築造年代が特定される以前に立てた説も多く、また築造時期を無視した説も多いようだ。

諸説を全て検証するのは至難なので、ここでは候補として有力視されている九州説（吉野ヶ里遺跡に絞って）と畿内説（纏向遺跡に絞って）に絞って検証してみたい。

その前に文献史学上の疑問として、魏志倭人伝の「女王国の東、海を渡って千余里（70～90 キロメートル）で、また国が有り、皆、倭種である」。「また、侏儒国がその南にある。人の背丈は三、四尺（72cm～96cm、1 尺は 24.19 センチメートル）で、女王国を去ること四千余里。また裸国と黒齒国があり、またその東南にある。船で一年ほど行くと着くことができる。」の項について検証しておきたい。専門家の間では、小人国、裸国、黒

齒国は架空の話とされている。確かに魏使が見聞し皇帝らに報告した内容ではないし、別の逸話を陳寿が引用したのであろう。だが前段の「倭種の国」は史料価値があるとされ、九州説論者の中には、この倭種の国は四国であり、畿内説の場合には該当する国が無いとし、これを最大の根拠として九州説が正しいと主張している大学教授もおられるようだ。そして畿内説論者の学芸員の中にもこの点で苦慮している方もおられるようだ。しかし、このような解釈が正解なのだろうか？この項の中でも倭種の国より遠い倭儒国、裸国、黒齒国は具体的に名前を記述している。この項以外もクニの名前は全て明記されているのに、この女王国のわずか千余里にあったとする倭種の国だけがクニの名が書かれていないのは不自然で且つ奇妙である。これは倭儒国、更には裸国と黒齒国は遠くにあるので、「話の流れとしてその間の千余里のところに倭種の国がある」と入れただけであると解釈すべきではなかろうか。この後段は架空とし、前段だけを取り上げるというのは文献史学的に見ておおいに疑問である。この項は邪馬台国の位置特定の決め手にはならないので邪馬台国論争から除外すべきであろう。

魏志倭人伝には遠くに在って国名だけしか分からない国としても、「斯馬国、己百支国、伊邪国、都支国、彌奴国、好古都国、不呼国、姐奴国、對蘇国、蘇奴国、呼邑国、華奴蘇奴国、鬼国、爲吾国、鬼奴国、邪馬国、躬臣国、巴利国、志惟国、烏奴国、奴国」が記載されている。また、南の狗奴国の男王卑弥弓呼とは不和との記録もある。全て中国側が一方的につけた国名である。

現在は遺跡、古墳や発掘物は放射線炭素 14 年代測定法により年代が特定されている。築造時期が分からなかった時代、または築造等の時期を考慮しない説もあるので、まずは考古学的に遺跡類と魏志倭人伝の記述が合致するかを検証してみる。この検証により議論する資格があると認められた候補地について魏志倭人伝の記述を文献史学、考古学、天文学等を駆使して専門家に検証していただけることが期待される。

卑弥呼が魏より与えられた金印はまだ発掘されていないし、銅鏡 100 枚は特定されていないので邪馬台国の決定打にはならない。古墳の発掘により卑弥呼の墓を特定し、卑弥呼が授けられた金印や銅鏡等が発掘されれば、奴婢 100 人余の殉教者の人骨または痕跡が判明されれば決定打となる。いずれにしても発掘を待つしかない。先ず現在までに発掘された遺跡が卑弥呼の宮室候補にふさわしいか、また古墳が卑弥呼の墓候補に合致するかどうかを検証する。

○距離、長さの単位と換算

ネットの書き込みによると

【・魏朝や西晋朝は、漢代の長里（1 里＝400～500m）ではなく、周代の短里（1 里＝76～77m）を採用していた。

・魏尺は約 24.19 センチメートルとされている。里は「尺」を基準にしており、一般的には「1 里は 300 尺」とされているようだ。魏の「里」は「短里」と呼ばれる概念もあり、これは「1 里が 70～90 センチメートル」とされることが多い。魏時代（西暦 3 世紀）頃の『1 歩』は『6 尺』である。当時の『1 尺』は 24.12cm といわれるので、6 尺は 1.4472m となる。歩 100 歩は 144.72m になる】とある。これを整理すると魏尺は 24.19 センチとされているので 1 里（300 尺）は $24.19/100 \times 300 = 72.6$ メートルとなる。

1 歩（6 尺） $24.19 \times 6 / 100 = 1.45$ メートル

	1 里 (300 尺)	1 尺の換算値	小人国の身長 3~4 尺	1000 里の距離	卑弥呼の墓の径 100 歩 (600 尺)
魏が漢代の里を使用していたとした場合	400~500 メートル	133~167 センチメートル	399~668 センチメートル	400~500 キロメートル余	798 メートル
魏が周代の短里を使用したとする場合	70~90 メートル	23~30 センチメートル	69~120 センチメートル	70~90 キロメートル余	138~180 メートル
魏尺 24.19 センチの場合	72.5 メートル	24.19 センチメートル	73~96.7 センチメートル	72.5 キロメートル	145 メートル
備考				短里が現代の実測値に近い	単里が妥当と思われる

2. 検証の条件を整理する。

①地図

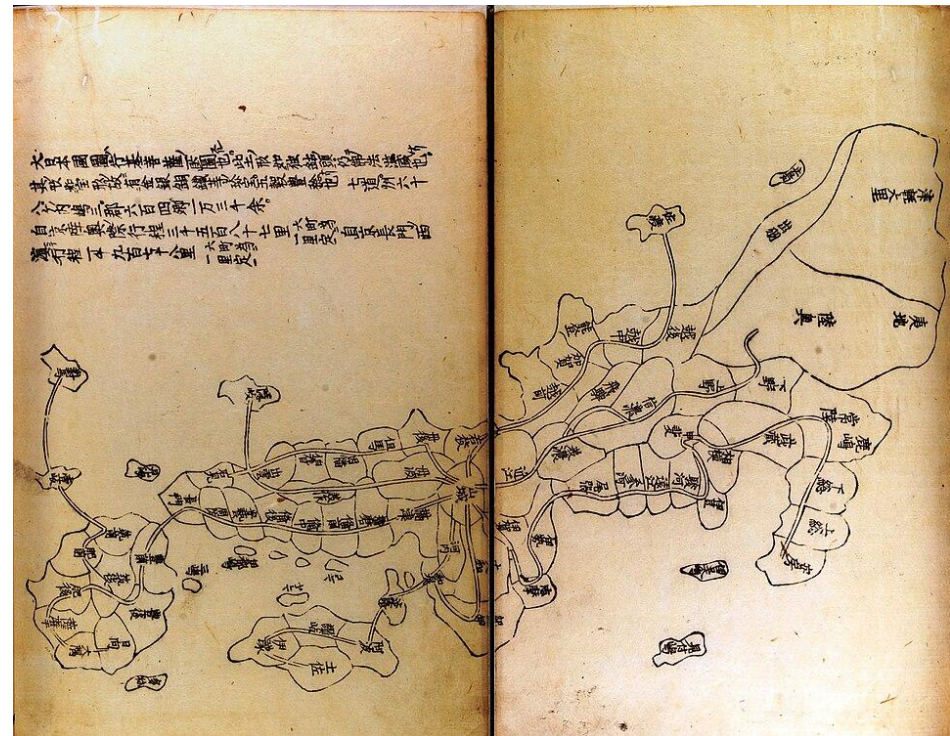
行基図の写本

3 世紀中頃の倭国に地図はなかったはずである。7 世紀の行基図と言われる地図が最古である。九州を頭にして各地方が縦にならんだ図が残る。3 世紀の列島認識もそれ以上ではないだろう。現代の地図に近い地図は江戸時代になってからやっと作成されている。現在の地図の知識がない古代人であることを念頭に入れて検証する。3 世紀ごろの古代人は倭国の中で北九州が半島に最も近く、それから先は徐々に遠くなるので、日本列島が南北方向か東西方向、もしくはその間の方角に伸びているとの先入感があったとしてもおかしくなからう。

行基図には明暦 2 年 (1656 年) 村上勘兵衛刊行とある。2 枚の画像を合成) 左上に「大日本国図は行基菩薩の図する所也」より始まる説明が記されている。

行基が生きていた時代の「行基図」が実在するならば、都は大和国平城京 (数年の例外はあっても) にあったのだから、大和国を中心とした地図の筈であるが、こうした地図は見つかっていない。このため、本当に行基が地図を作ったのかを疑問視し、「後世の人々が作者を行基に仮託したのが伝説化したものではないか」とする見方もあり、もっと後の時代の地図の可能性もある。

いずれにしても 3 世紀ごろの地図は見つかっていないし、地図らしきものはなかったと推測される。



②距離の測量

北九州の不弥国までは距離を書いている、不弥国から邪馬台国までは日数で表現している。魏使が海上の距離を測定できるはずもなく、測定したのであれば別の時期に別人が行ったのであろう。魏使は当然陸上でも測定できないので日数で表したのだらう。

陸上では歩測や或いは天文学を駆使し、例えば南北方向の距離を測定した場所との緯度の差異で距離を推定するとかのいくつかの方法があったのだらうが、少なくとも海上の距離を測定する方法は無かったはずである。陳寿が魏使の報告書以外の他の資料を組み合わせたのであろう。

従い、当時天文学が普及していなかった倭国内の方角や位置について検証時には過度に固執すべきではない。我々の分っている地理認識が当時も存在していたかのような想定で検証すべきではない。

魏志倭人伝に「帯方郡と邪馬台国の距離が1万2千里は計算した」とある。不弥国以降は日数しか書かれていない。里程は測定できなかったので、算出できるはずがない。もし検証条件として重んじるならその算出方法の推測は必須である。が、至難であろうと思われる。

特に海上の距離であるが、当時の船は照明も無いので、半島や島伝いに昼間に移動し夜間は港に停泊し、天候が荒れると港に避難したはずなので、海上の移動速度は算出できないはずである。単なる憶測だが、狗邪韓国から不弥国までの里程については「天文学をできるだけ駆使し、海上移動のおおよその距離の測量をしたのなら、それは武人の魏使ではなく別の天文学知識を有する人物らが異なる時期に北九州や島まで来て緯度を測量するなどして、大陸の位置と距離等を参考にしたのであろう」

書き込みの説を紹介する。

・【古代の大陸人は、この世界は東西 28,000 里、南北 26,000 里と考えていた。つまり帯方郡から 12,000 里というのは、世界のほぼ辺境である事のとえである。】という説がある。

・「何時に出港しようが、また日没が何時頃であろうが……つまり 1 日何時間航海出来たのかを問わず、それから追い風向かい風を問わず、とにかく 1 日スケジュールの海上移動を千里とカウントする」という説がある。

③方角の測量

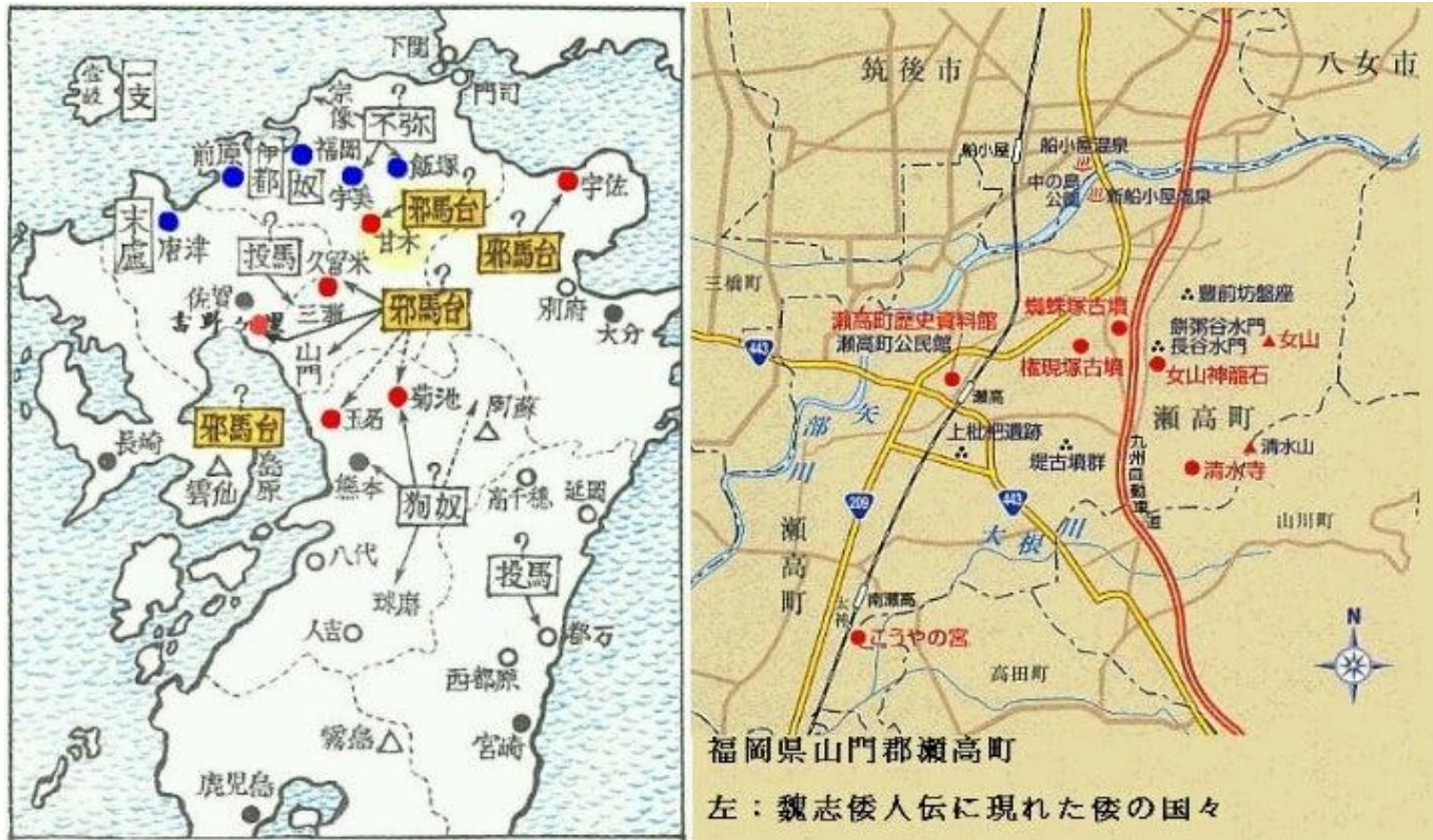
方角についての書き込みを見つけたので紹介する。

【そもそも現代人は東西南北の四極で方位を捉えることを当然だと思っているが、これとて自明のことではない。非常に素朴な段階の生活を考えると、初めは地勢によって方位を決めたのである。例えば一方にしか山がない地域ならば、山側とその逆側、それに山を前にしてその左右といった捉え方をする。地域によっては海や川が基準となる。地形によってはもっと複合的な基準を持つこともありうるだろう。

しかし行動や交流の範囲が広がると、ある地域でしか通用しない方位観では不便になる。そこでやっと太陽を仰ぐ。太陽は、どこから見ても、東から出て、南に昇り、西に沈む。これによって東西南北の段階に達するが、まだ人類普遍の方位観を獲得したとは言えない。なぜなら、日の出・日の入りの方角は季節によって変動するので、どこを正位とするかには選択の余地が残るからである。

太陽によって東西を決定するときには、日の出・日の入りの、夏至の日の方角を基準とするか、冬至とするか、その中間にするか、または季節に従って正位が変動すると考えることもありうる。だから東と西が一直線で結ばれるとも限らないし、東西南北の領域が四等分されるとも限らない。方位とはかくも人為的なものである。さらに複数の方位観が併用されるときには、それらを組み合わせてより複雑な方位観が形成されることもありうる。

行程の中に末盧国から伊都国へは「東南陸行五百里」とある。末盧国を呼子、伊都国を伊都郡旧前原市付近とすると、今の地図で見てその方角は東であって東南とは言えない（約 45 度のずれがある）。しかし、もし夏至に近い時期の日の出の方角によって東を認識したとすれば、東南と感じても不思議はない。】



3世紀中頃の方角と現在の方角とはずれがあるはずであり、そのずれを検証しその差異を数値化できない限り魏志倭人伝に書かれている方角を鵜呑みにすべきではなかろう。およそその方角と理解すべきである。当時の中国では太陽の軌道や天体観測で天文学者が方角を決めたのだろうが、当時中国の天文学者が海を渡って倭国に来て天体等を測量したとの記録はないし、天文学者ではない魏使は自分が歩いた倭国内の各地の方角は太陽の軌跡等で判断した大まかな方角と理解すべきだろう。

例えば「会稽東治の東に女王国がある」についてだが、まず方角は今日の真東とは異なる。

邪馬台国論争において昔から争われている論点として、蘇州市の「会稽東冶（かいけいとうち）」と福州市の「会稽東冶（かいけいとうや）」のどちらが正しいかという議論がある。

『三国志』（280年～294年に魏志倭人伝は作成された）

計其道里當在会稽東冶之東

「女王国（邪馬台国）までの）**道里を計ると、まさに会稽東冶の東にある**」

『後漢書』（5世紀に作成）

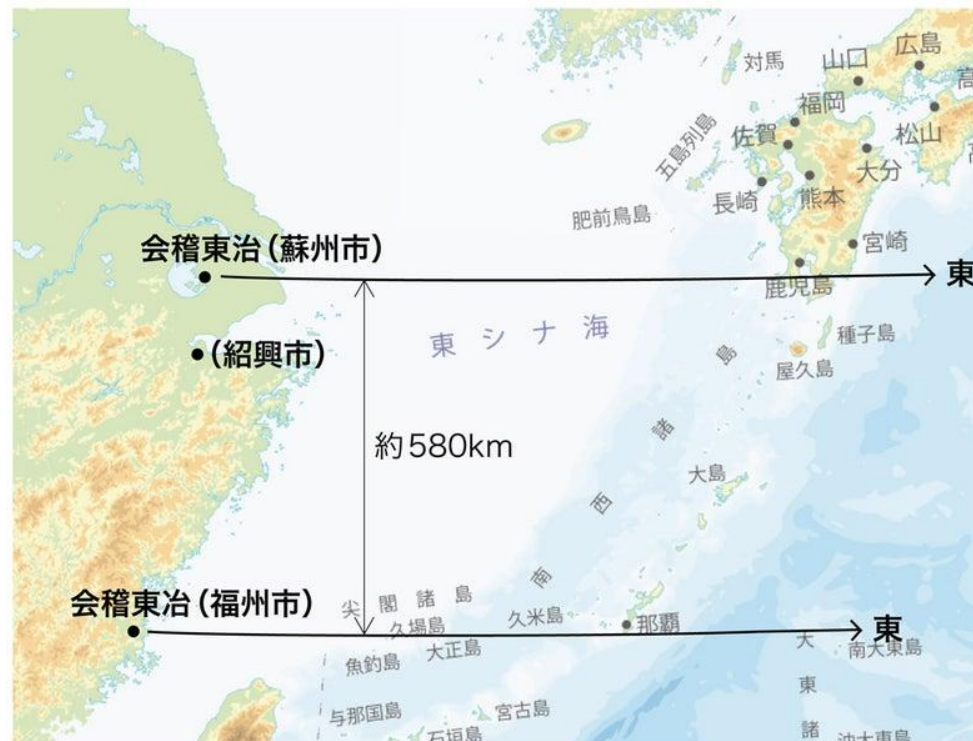
其地大較在会稽東冶之東

その地（邪馬台国）は**だいたい会稽東冶の東にある**。（真東ではない）

例えば、魏志倭人伝に「その（邪馬台国までの）道の里程を計算すると、まさに（中国の）（会稽東冶の東にあるはずだ）」とあるが、福州市の東冶（とうや）が正しいとの説がある。

当時魏が倭国を優遇したとされた理由のひとつとして、当時魏国は南に接する呉国と敵対していたので、倭国がもっと南方（沖縄辺りの緯度）に位置すると誤解して、倭国と同盟を結ぶと呉を挟撃できるとの思惑があったとの説がある。魏の狙いを知った卑弥呼が倭国の国力や位置を誇張して魏使に伝えたとの見方はうがち過ぎかもしれないが、可能性はあろう。

会稽東冶か会稽東冶だけを特定しても邪馬台国特定の決定打にならないだろう。



※地理院地図をもとに作成

3. 古墳や遺跡の検討

炭素 14 年代測定方法によって古墳の築造時期や建造物の存在した時期が特定されているので、検証対象は築造時期が合致する 3 世紀中期頃のものに限定すべきである。

3 - (1). 古代の史料にて、当時の状況を整理する。

西暦	倭国に関する中国の史料	三国史記（百済・伽耶・新羅に関する）	備考
----	-------------	--------------------	----

57年	倭の奴国の使者、洛陽にいたり、(後漢の初代皇帝の) 光武帝より印綬をうける『後漢書』		江戸時代に「漢委奴国王印」(金印)が発見され、現在は国宝になっている。贋作説もあるが、金 95.1%、銀 4.5%、銅 0.5%、その他(1989年蛍光X線照射による分析)の純度で江戸時代には一般に入手できないし、中国の1~2世紀の発掘物の金の組成と極似しているため、贋作ではなかろう。
59年		倭と国交を結び使節を交換	
73年		倭人が木出島に侵入	
107年	倭国王帥升(すいしょう)ら後漢に生口160人を献上『後漢書』		日本史上、外国史書に初めて名を残した日本人及び日本史上最古の歴史上人物であり、実在性が確定する中で、名前が記録に残る最古の日本人である。
121年		倭人が辰韓の東部辺境に侵入	
123年		辰韓、倭国と講和	
146~189年	<ul style="list-style-type: none"> 倭国大乱、女王卑弥呼を共立『魏志倭人伝』 倭国大乱があり、さらに互いに攻め合い、8年±数年も主無き状態となった。卑弥呼という名の一人の女子が有り、年長だが嫁いでいなかった。鬼神道を用いてよく衆を妖しく惑わした。ここに於いて共立し王にした。『後漢書』 		
173年		倭の女王卑弥呼の使節来訪	

232 年		倭人が侵入、金城を包囲、辰韓王みずから出て戦い、賊を撃退、騎馬隊が追撃して 1000 人を殺し捉える	
239 年	卑弥呼、魏に遣使、親魏倭王の称号を受ける『魏志倭人伝』		<ul style="list-style-type: none"> ・制詔、親魏倭王卑弥呼 ・汝を以て親魏倭王と為し、金印紫綬を与え… ・特に汝に紺地句文錦三匹、細班華罽五張、白絹五十匹、金八両、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠、鉛丹各五十斤を下賜…
240 年	<ul style="list-style-type: none"> ・魏の帯方太守の弓遵（きゅうじゅ）は建中校尉の梯儁（ていしゅん）などを倭国に遣わし、詔書・印綬を奉じて、倭国に詣り、倭王に拝仮し、並びに詔を齎（もたら）し、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜った『魏志倭人伝』 （魏使・帳政、邪馬台国にいたる） 		<p>（帯方郡）太守、弓遵は建中校尉の梯儁等を派遣し、梯儁等は詔書、印綬（＝親魏倭王という地位の認証状と印綬）を捧げ持って倭国へ行き、倭王に授けた。並びに、詔（＝制詔）をもたらし、金、帛、錦、罽、刀、鏡、采物を下賜した</p>
247 年	<ul style="list-style-type: none"> ・正始八年、女王は帯方郡太守王頎（おうき）に載斯烏越を使者として派遣して、狗奴国との戦いについて報告。 ・正始八年(247)、(弓遵の戦死を受けて)王頎が帯方郡太守に着任した。倭女王の卑弥呼と狗奴国の男王、卑弥弓呼素とは和せず、倭の載斯烏越等を帯方郡に派遣して、互いに攻撃しあっている状態であることを説明した。(王頎は)塞曹掾史の張政（ちょうせ 		

	い)等を派遣した。それにより詔書、黄幢をもたらして難升米に授け、檄文をつくり、これを告げて諭した。』『魏志倭人伝』		
248年	<ul style="list-style-type: none"> ・卑弥呼が死んだので、大いに塚をつくった。径は百歩(魏の単位で換算すると約135メートル)、殉死した奴婢は百余人。 ・この年(？か不明)男王が卑弥呼の後継に立てられたが混乱を抑えることができず、卑弥呼宗女の「台与(とよ)」(または「耆与)」が巫女女王になることで連合国が収まった。『魏志倭人伝』 ・(この年?)、女王に就いた台与は、帯方郡に帰任する張政に掖邪狗ら20人を同行させ、掖邪狗らはそのまま魏の都に向かい男女の生口30人と白珠5,000孔、青大句珠2枚、異文の雑錦20匹を貢いだ。『魏志倭人伝』 		<ul style="list-style-type: none"> ・塚の径は、形状は円形で円墳か前方後円墳の後円墳部であろう。 ・魏志倭人伝には、卑弥呼が死去後に台与が女王になったことも、張政ら魏志使を送り届けたのも同じ年のように書かれているが、男王が擁立されるまでの時間、更に混乱し、台与が擁立されて平定し、それを見届けた魏使・張政らを台与が送り出すまでが同じ年のうちとするのはいささか展開が早すぎるようなので本当は数年を経たのだらうと思われる。
241～266年			<ul style="list-style-type: none"> ・この間に畿内に箸墓古墳が築造されたとされる。 前方後円墳で、口円部の径150メートル 方墳で東西約23.7メートル、南北約22.9メートル、高さ約6メートル

266 年	泰始 2 年、倭女王、西晋に朝貢。『晋書の四夷伝』 (以降倭国の消息、413 年まで中国の史料に記述なし)		
280 年～294 年		西晋の陳寿が 3 世紀末に三国志の中で魏志倭人伝を著す。(280 年に呉が滅亡し、297 年に陳寿が死去)	
312 年		倭国王が使者を派遣、王子の花嫁を求む	<ul style="list-style-type: none"> ・少なくともこの年にはすでに男子王になっていることが分かる。ヤマト王権？ ・4 世紀初頭に福岡県の祇園山古墳が築造された。
364 年		倭軍、大挙して新羅に侵入、倭軍大敗	
393 年		倭軍侵入、金城を包囲、倭軍大敗	
400 年		高句麗、5 万の兵で新羅救援、倭軍を退く『好太王碑』 好太王碑;高句麗の第 19 代の王である好太王(広開土王)の業績を称えた、現在の中国吉林省に存在する石碑	
404 年		倭軍侵入、高句麗との戦いに敗北『好太王碑』	
405 年		倭兵が新羅に侵入、明活城を攻める	
413 年	倭王讃(ヤマト王権時代の倭の五王の一人とされる)が東晋に朝貢『晋書』		4 世紀ごろから 6 世紀ごろまではヤマト王権時代とされる

この時代小舟で航海するのは大変だろうと推測していたが、想定以上に大陸と交易し、倭国が中国の皇帝に朝見していたようだ。

3-2)魏志倭人伝の邪馬台国に関する記述

(「魏倭人伝中の邪馬台国」より) 次のようにある。(ウイキペディアより転用する。朱記は筆者が加筆)

・「倭人は帯方郡の東南、大海の中に在る。山がちの島に身を寄せて、国家機能を持つ集落を作っている。昔は百余国で、漢の時、朝見する者がいた。今、交流の可能な国は三十国である。」

・「女王国より以北は、その戸数や距離をおおよそ記載出来るが、その他の国は遠くて情報もなく、詳しく知ることは出来ない。次にシバ国が有る。次にシハクシ国が有る。次にイヤ国が有る。次にトシ国が有る。次にミドゥ国が有る。次にカウコト国が有る。次にフウコ国が有る。次にシャドゥ国が有る。次にタイソ国が有る。次にソドゥ国が有る。次にコイフ国が有る。次にカドゥソドゥ国が有る。次にキ国が有る。次にキゴ国が有る。次にキドゥ国が有る。次にヤバ国が有る。次にキュウシン国が有る。次にハリ国が有る。次にシユイ国が有る。次にヲドゥ国が有る。次にドゥ国が有る。ここは女王の境界の尽きる所である。」

・「その(女王国の)南に狗奴(コウド、コウドゥ)国があり、男子が王になっている。その官に狗古智卑狗(コウコチヒコウ)がある。女王には属していない。帯方郡から女王国に至るには、万二千余里である。」

「その(邪馬壱国までの)道の里程を計算すると、まさに(中国の)会稽から東冶の東にあるはずだ。」(東冶は東冶の誤字と考える説が有力のようである)

・倭国には元々は男王がいて、70-80年ほど在位したが、彼が崩御した後に倭国は乱れ、お互い何年も攻め合っていたので、一人の女子を共立し王とした。

名を卑弥呼といい、女王は鬼道を使い、能く人心を掌握し、既に高齢で、夫は持たず、弟が政治を補佐した。卑弥呼が王位と為ってからは、人は会見することが少なく、1,000余の女性が侍っていて、ただ一人の男子が飲食の世話や取次ぎをしていた。宮室や楼観で起居し、険しい柵を設け、常に多数の兵士が守衛をしていた。

・卑弥呼の死去によって、大いに冢が作られ、直径が100歩(150メートル)ほど、奴婢100余が殉葬された。その後男王が立てられたが、国中はこれに服さず更にお互いを誅殺し1,000人あまりが死んだ。再度、卑弥呼の親族で13歳の少女の台与を王と為し遂に国は定まった。先に倭国に派遣された張政は檄文をもって台与を諭した。台与も魏に大夫率の善中郎將掖邪狗など二十人の使者を送り、男女の奴隷30人、白珠五千孔、青大句珠二枚、異文雜錦二十匹を朝貢した。

（「大作冢」とは大きな塚を作るではなく大いに塚を作る、又は多数の冢を作るの意味である。（では径 100 歩(145 メートル)はいかなる解釈なのだろうか？墓とすれば、100 人余の殉教者が眠っているのに十分な大きさであろう）

（卑弥呼は呪術を司る巫女（シャーマン）であるとする見方がある 一方、単に祭祀を行っていたとする見解もある）

また、弟が政治を補佐したという記述から、巫女の卑弥呼が神事を司り、実際の統治は男子が行う二元政治（ヒメヒコ制）とする見方もある。）

・「(投馬国から) 南、邪馬壱(ヤバキ)国に至る。女王が都を置く所である。水行十日、陸行一月である。官にイシバがある。次はビバショウといい、次はビバクウシといい、次をドカテイという。およそ七万余戸。」(6 人/戸と仮定すれば 7 万戸であれば人口は 42 万人となる？話半分で 21 万人?)

・卑弥呼が王位と為ってからは、人は会見することが少なく、1,000 人余の女性が侍っていて、ただ一人の男子が飲食の世話や取次ぎをしていた。宮室や楼観で起居し、険しい柵を設け、常に多数の兵士が守衛をしていた。



所在地	佐賀県神埼軍吉野ヶ里町戸神崎市にまたがる吉野ヶ里丘陵にある	奈良県桜井市の三輪山の北西麓一帯
遺跡の築造年代	紀元前 3 世紀から紀元 3 世紀まで	2 世紀末から 4 世紀前半
環濠集落の規模	117 平方メートルにわたる環濠集落	東西約 2km・南北約 1.5km に及び大字辻・太田・東田・大豆越・草川・巻野内・穴師・箸中・豊前・豊田にまたがる。およそ楕円形の平面形状となつて、その面積は 3km ² (300 万 m ²) に達する。
人口	後期には、環濠がさらに拡大し、二重になるとともに、建物が巨大化し、3 世紀ごろには集落は最盛期を迎える。北内郭と南内郭の 2 つの内郭ができ、文化の発展が見られる。甕棺の数などから推測しておよそ 1,200 人、吉野ヶ里を中心とするクニ全体では 5,400 人くらいの人々が住んでいたと推測される。(魏志倭人伝に書かれている 70,000 戸より少ない)	吉野ヶ里遺跡の規模と比べると相当の人口だったはず
	<p>濠の内外には木柵、土塁、逆茂といった敵の侵入を防ぐ柵が施されていた。</p> <p>多数の遺体がまとまって埋葬された甕棺、石棺、土抗墓は、住民や兵士などの一般の人の共同墓地だと考えられている。一方、遺跡の南部と北部にあわせて 2 つの墳丘墓（それぞれ「北墳丘墓」「南墳丘墓」と命名されている）があり、こちらは集落の首長などの墓ではないかと考えられている。発掘された甕棺の中の人骨には、怪我をしたり、矢じりが刺さったままのもの、首から上が無いものなどがあり、倭国大乱を思わせる戦いのすさまじさが見てとれる。また、</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・土坑」(南北 4.3 メートル、東西 2.2 メートル、深さ 80 センチ) から桃のタネ約 2,000 個が見つかった (呪術に使われたとされる) ・3 世紀に建造されたとされる建物の柱穴が 100 箇所以上にわたり検出された。建物を何度も建てたり取り壊したりしたと考えられる「3 世紀初めに突然現れた集落で、規模も大きい。 <p>寺沢はこのように述べた後、「このような考古学的・文献学的特徴をトータルに備えた巨大な集落は、三世紀の日本列島には他に存在しない。とすれば、三世紀の纏向遺跡こそが、『ヤマト王権』と呼ばれる列島最初の王権の都宮が置か</p>

	<p>ガラス製の管玉などの装飾品と一緒に埋葬されたものも多く見ついている。</p>	<p>れた都市であった可能性がきわめて高いといえる」と結論付けている。</p> <p>・石野博信は、大和川につながる護岸工事の施された大溝や祭祀場が検出されたこと、また、近畿以外の諸地域からもたらされた土器が異常に多いこと、そして、これらの土器の構成から纏向には少なく見積もっても5人に1人はヤマト以外のクニグニからやってきた人々であろうと推定されることを論拠として、決して自然発生的なムラではなく、人工的に造られた都市であるとしている。</p>																				
<p>出土品</p>	<p>多数の土器、石器、青銅器、鉄器、木器が出土している。勾玉や菅玉などのアクセサリ類、銅剣、銅鏡、織物、布製品などの装飾品や祭祀に用いられるものなどがある。</p>	<p>外来系出土品の割合</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>系</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>吉備系</td> <td>25%</td> </tr> <tr> <td>伊勢・東海系</td> <td>20%</td> </tr> <tr> <td>河内系</td> <td>20%</td> </tr> <tr> <td>北陸・山陰系</td> <td>17%</td> </tr> <tr> <td>播磨系</td> <td>8%</td> </tr> <tr> <td>近江系</td> <td>5%</td> </tr> <tr> <td>西部瀬戸内海系</td> <td>3%</td> </tr> <tr> <td>紀伊系</td> <td>1.5%</td> </tr> <tr> <td>関東系</td> <td>0.5%</td> </tr> </tbody> </table>	系	割合	吉備系	25%	伊勢・東海系	20%	河内系	20%	北陸・山陰系	17%	播磨系	8%	近江系	5%	西部瀬戸内海系	3%	紀伊系	1.5%	関東系	0.5%
系	割合																					
吉備系	25%																					
伊勢・東海系	20%																					
河内系	20%																					
北陸・山陰系	17%																					
播磨系	8%																					
近江系	5%																					
西部瀬戸内海系	3%																					
紀伊系	1.5%																					
関東系	0.5%																					

		<p>古代から交流が盛んで関係が深かった伊勢国で造られた物と、伊勢湾を挟んで東側に位置する尾張国で造られた物が多い。</p> <p>九州系が少ないので、九州とは別の勢力であるとも解釈できるし、すでに九州から畿内に東征されていたとも解釈できる。</p>
--	--	---

3-(4). 径 100 歩 (145 メートル) の卑弥呼の墓

魏志倭人伝には、卑弥呼が死去 (248 年) したとき、径百余歩の冢 (盛り土した塚) を作り、奴婢百余人が殉葬したとされているので、それ相当のサイズだろうからそれを前提に候補を調べる。魏の長さの単位「歩」は、古代中国の周時代に制定された尺貫法における長さの単位で 1 歩は本来 6 尺で、約 1.35 メートルに相当する。

3 世紀の邪馬台国時代には、畿内で見られるような大規模古墳群は九州では見つかっていない。奈良盆地を中心に、大規模な古墳や宮殿跡が数多く見ついている。これらは明らかに列島全体に影響力を持つ権力が存在していた証拠である。特に 3 世紀後半から 4 世紀にかけて築かれた前方後円墳は、他地域には見られない独特の形態であり、強力な政治的中枢が畿内にあったことを示している。前方後円墳は畿内で始まったという説がある。そしてヤマト王権(4 世紀から 6 世紀)の築造許可を得た全国の豪族らに普及していった。

卑弥呼の時代から約 100 年後、列島を支配するヤマト王権が確立していく。畿内に邪馬台国を置くと、この変化が「地域の交代」ではなく「政権の発展」として理解できる。(政権交代の可能性も十分にあったはず)

大王墓級の古墳が九州にほとんど存在しないことは、当時の九州が地域的な中心であったにせよ、列島全体を統合する王権の拠点ではなかったことを示唆している。

	祇園山古墳	箸墓古墳	纏向石塚古墳
所在地	福岡県久留米市御井町 299-219	奈良県桜井市箸中	奈良県桜井市太田字石塚
形状	方墳 (基部楕円形)	前方後円墳	前方後円墳
規模	東西約 23.7 メートル、南北約 22.9 メートル、高さ約 6 メートル	墳丘長さ 278 メートル 後円部径 150 メートル	墳丘長さ 96 メートル 後円部径約 64m、周濠幅約 20m

<p>築造時期</p>	<p>4 世紀初頭</p>	<p>3 世期中～末（卑弥呼の時代にかさなる）奈良県立橿原考古学研究所が行った事前調査で周濠の底から土器が多量に出土した。これの実年代について、奈良県立橿原考古学研究所は放射線炭素 14 年代測定法により 280～300 年（±10～20 年）と推定している）</p>	<p>2 世紀末～3 世紀前半（卑弥呼の時代より前）濠の最下層から出土したヒノキの板材の残存最外年輪の暦年は放射線炭素 14 年代測定法によって西暦 177 年との測定結果が出ている。しかし、年輪年代学の光谷拓実は、残存の辺材部の平均年代幅をもとに推計し、「その伐採年はどうみても 200 年を下ることはない」と結論づけている</p>
<p>出土品</p>	<p>三角縁神獣鏡（伝）・変型方格規矩鏡（伝）、墳裾外周甕棺 1 号墓から後漢鏡片、硬玉製勾玉、碧玉製管玉、鉄製刀子、その他鉄製武器および農具</p>	<p>宮内庁職員によって、特殊器台形埴輪片、壺型埴輪片、有段口縁の底部穿孔壺形土器が採掘されている。（年代測定可能）</p>	<p>弧文円板、朱塗鶏形木製品</p>
<p>備考</p>	<p>・築造時期や規模から、宝賀寿男や地元研究者などにより、この古墳を邪馬台国の卑弥呼の墓に比定する意見がある。（形状や築造時期が異なることには触れていない） ・3 世紀の邪馬台国時代に相当する遺跡や遺物は九州にも存在する。しかし、畿内で見られるような大規模な古墳群や、広域支配を裏付ける明確な証拠は見つかっていないとされている。</p>	<p>・被葬者として宮内庁より第 7 代孝靈天皇皇女の倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめのみこと）（*1）の墓と治定（じじょう）されているので、発掘できない。</p>	

*1. 倭迹迹日百襲姫命

日本書紀には「百襲姫（倭迹迹日百襲姫命）が驚き叫んだため大物主神は恥じて御諸山（三輪山）に登ってしまった。百襲姫がこれを後悔して腰を落とした際、箸が陰部を突いたため百襲姫は死んでしまい、大市に葬られた」とあり、神話上の人物を彷彿させる。また多くの専門家が孝霊天皇の实在そのものを疑問視しているようであり、その皇女はなおさら实在性が疑問であろう。江戸時代に治定された天皇陵がそのまま現在も採用されているが、天皇陵に治定されていない墓を発掘した結果、天皇陵と判明した事例がある。他の墓がその天皇陵と治定されていた。

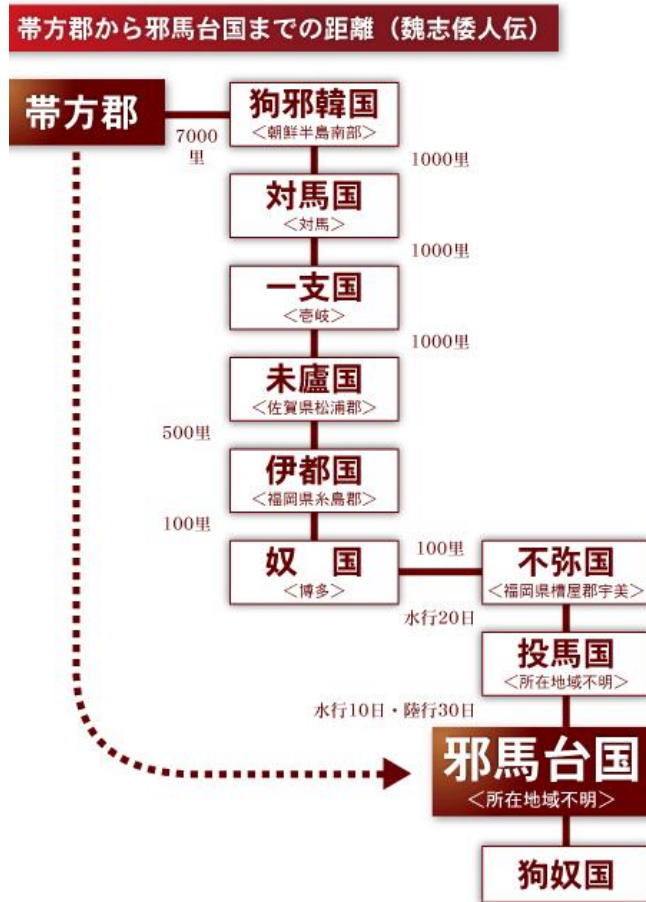
箸墓古墳



2-5. 魏使の歩いた道

魏志倭人伝の記述と通りに辿ると現代の地理では邪馬台国はフィリピンの辺りとなる。

- ・伊都国は末蘆国の東南にある
- ・奴国は伊都国の東南ある
- ・不弥国は奴国の東にある
- ・投馬国は不弥国の南にある
- ・邪馬台国は投馬国の南にある



九州説は1月（ひとつき）の記述が1日（いちにち）の書き間違いだとかして、読み変えている。畿内説は、魏使が方角の東方向を南方向と認しているとし、魏使一行が東方向に向かったのに、南に向かったとしている。

4. 九州説と畿内説の根拠と弱点について紹介する。(ウィキペディア)



4-1). 九州説の根拠

・帯方郡から女王國までの距離を直線距離ではなく行程だと考えれば 12,000 里のうち、福岡県内に比定される伊都国までで既に 10,500 里使っていることから、残り 1,500 里（佐賀県唐津市に比定される末盧國から伊都國まで 500 里の距離の 3 倍）では邪馬台国の位置は九州地方を出ないとされること。（水行 30 日陸行一月を無視している、それに 12,000 里は倭国内の移動は日数で記載しているのは、距離を測定できないから

である。12,000 里は算出したとあるので、算出方法を検証する必要がある。単に邪馬台国がはるか遠くであるとの表現方法であるとの説がふさわしいと思われるが)

- ・邪馬台国と対立した狗奴国を熊本（球磨）の勢力と比定すれば、狗奴国の官「狗古知卑狗」が「菊池彦」の音訳と考えられること。
- ・「魏志倭人伝」には邪馬台国は伊都国や奴国より南にあるとする記述が三箇所あり、また会稽東冶(かいけいとうや)の東(緯度的にはほぼ沖縄県に一致する)にあるとしていること。また近傍に配置されるべき一大率が伊都国におかれたとしていること。(一大率が一人の大率かは分からないが、女王国が伊都国周辺の諸国を巡察させているのであれば、邪馬台国が遠方にあったとするのは当然である)
- ・「魏志倭人伝」の記述は北部九州の小国を紹介する一方で、畿内説が投馬国に比定する近畿以西の道程に存在したはずの有力な安芸国、吉備国や出雲国の仔細には全く触れられておらず、伊都国から近畿圏まで含む道程の記述が完全に欠けている。(魏使は諜報活動をしたかったが、倭国が大国に侵略するのを恐れ、倭国内の道程をできるだけ魏使に隠したことは十分に考えられる)
- ・「古事記」、「日本書紀」には、天皇による熊襲討伐など九州征伐が記載されており、景行天皇の頃までは北九州が大和朝廷の勢力圏外にあったと考えられる。また3世紀の時点で畿内から北九州までを連合国家として治めていたのなら6世紀に国造が設置されたという近年の研究にも疑問が生じる。
- ・「魏志倭人伝」中で邪馬台国の埋葬方法を記述した『有棺無槨』を甕棺と見なす見解に基づき、北九州地方に甕棺が多数出土していることや、石棺無槨の墳丘墓が多数出現していること。また「無槨」の記述から、槨を持つ畿内の古墳は当てはまらない¹⁾。
- ・福岡県糸島市の平原遺跡出土の大型内行花文鏡が伊勢神宮の神道五部書に伝わる八咫鏡と同型・同規模であり、天照大御神といった太陽神信仰との関係が考えられること。・福岡県久留米市には規模や副葬品、石棺無槨、主体部および周囲の集団墓(宝賀寿男は殉葬墓ではないかとする)などの状況が『魏志倭人伝』の卑弥呼の墓記載とよく一致する祇園山古墳(方墳であり、築造時期が4世紀初頭であり、年代が合致しない)があること。

4-2). 九州説の弱点

・魏から女王たちに贈られた品々や位が、西の大月氏国(イラン系のクシャーナ朝)に匹敵する最恵国への待遇であり、小領主へ贈られたものとは考えにくいこと。

・大月氏国が10万戸の人口40万人、また考古学では当時の日本の人口が百数十万人とされている事などから、奴国2万余戸、投馬国5万余戸、邪馬台国7万余戸、更に狗奴国といった規模の集落が九州内に記述通りの順番に収まるとは考えにくいこと。(この点では阿波説はもっと収まりにくい)ただし使節が倭国の戸数を全て調べたとは考えられず、倭人からの伝聞が含まれると考えられるため、記載された戸数が必ずしも正確とは断定できない。(女王国の地位を安定化するために魏の力を利用したい女王国連合が倭国の国力が強大であるかのように、卑弥呼弥高官が魏使に誇張して伝授した可能性は充分にあるが、魏使らも自分で見聞し、当たらずとも遠からずの判断はしたのではなかろうか?魏使は物見遊山で訪問したわけではなく、諜報活動も魏使の使命だったはずなので、自らは報告を誇張していないだろう)

・中国地方や近畿地方に九州をはるかに上回る規模の古墳や集落が存在していること。ただし九州説では卑弥呼の時代を古墳開始期説として採用しないため、問題ない。(現在では古墳の築造時期は特定されているので、この説は早急に見直されるべきだろう)

・九州説は古墳築造の開始時期を4世紀以降とする旧説に拠っているが、現在は古墳築造の開始を3世紀とする説が多く支持されている。ただし上述のホケノ山古墳(3世紀中後頃、4世紀前半の可能性もある)の事例などから、その開始時期を見直そうとする議論も行われている。

・漢書西域伝(西暦80年頃の成立)の「大月氏国、(中略)長安を去ること万一千六百里」の記述は綿密な測量に基づいているとは考え難く、単純に「非常に遠い」というニュアンスを表現した可能性がある。同様に「魏志倭人伝」の「郡から女王国まで万二千余里」の記述は、「非常に遠い」ことを示す婉曲的な表現に過ぎない可能性がある。(この里程を根拠に邪馬台国を論ずるのは避けるべき)なお、長安から大月氏国までの距離は洛陽から日本列島までの距離より1.5倍程度遠いが、中国中央から見れば同様に隔絶した辺境地帯であり、魏志東夷伝においてのみ短里表記とする根拠が乏しい。(不弥国までが里程になり、後は日数表示になっている。魏使は測量する知識も技術も待っていなかったもので、全て日数表示としたが、ほぼ半世紀後に魏志倭人伝を書いた陳寿が別の時期の別の資料を転用したとしたら、それが短里だったことはあり得るのではなかろうか?何の根拠もないが)

・そもそも魏または帯方郡の使者が邪馬台国の宮殿に実際に赴いたとする根拠が無い。卑弥呼は「婢千人を侍らしていた」とあるが、これは江戸城大奥の人員が特に多かった時期の人数に匹敵する。江戸時代より総人口、生産力、物資輸送力が遥かに劣る弥生時代末期において、このような大規模な集団を恒常的に維持するのは困難であり、特に九州内の一地方政権の力量では不可能に近い。卑弥呼に関する記述は伝聞に依拠したもの

と考えるのが妥当であり、邪馬台国までの里程や政治情勢等についても、同様に伝聞に依拠したものに過ぎない可能性がある。（女王台与（とよ）が魏使を送り届けたとあるので、邪馬台国を訪れたはずだが、これを疑うくらいならもう邪馬台国を議論することを止めた方が良いと思われる。魏使は諜報活動が使命であり、出来るだけ正確に皇帝に報告したと推測する。伝聞したこと以外に出来るだけ自分の眼で確認しながら情報収集したのは当然であろう。邪馬台国に長期に滞在した魏使は侍女 1,000 人や殉死した奴婢の人数や墓の径は自分で確認できたはずである。魏使は距離を測定する手段を持たないので、全て所用日数で報告書を作成したはずである。里程で記述しているのは倭国上陸後の不弥国までであり、半世紀ほど後に魏志倭人伝を著した陳寿が転用したのではなかろうか。それで魏志倭人伝では里程と日数を併用していたことの説明ができる。当時半島経由で交易は頻繁に行われ、そのために里程の精度を上げようとして、天文学者が同行し緯度を測定する等により不奴国までの里程を測量し、それを著した別の史料があったということは充分考えられる。魏使の倭国訪問以前か事後かは不明だが、そしてその里程だけが短里になった可能性はあろう）

4 - (3). 畿内説の根拠

邪馬台国畿内説には琵琶湖湖畔、大阪府などの複数の説が存在し、特に奈良県桜井市三輪山近くの纏向遺跡を邪馬台国の都に比定する説が有力である。邪馬台国畿内説では、「畿内には最大級の都市遺跡がある。魏に朝貢した邪馬台国はその当時の日本列島最大勢力であったはず」という仮定に基づいている。

- ・「邪馬台」は当時の中国語の発音で"*jamadə"であったと言語学的に推定され、当時の日本語では清音と濁音を区別しないことから、「大和」の当時の発音である"jamatə"と完全に一致すること。
- ・纏向遺跡は当時としては広大な面積を持つ最大級の集落跡であり、一種の都市遺跡である。
- ・年代調査の成果により、倭人伝の時代（卑弥呼 247 年頃（3 世紀半ば）没）と遺跡の時代（始期は 2 世紀後半(180 年)-3 世紀前半(210 年)頃。最盛期は 3 世紀終わり頃-4 世紀初め）が概ね合致していると考えられる。
- ・瀬戸内東部の勢力の技術によると見られる初期の前方後円墳が卑弥呼の没年近くに作られはじめ（箸墓古墳）、大和を中心に分布し、時代が下るにつれて全国に広がっていったこと。

・3世紀後半には北九州から南関東にいたる全国各地の土器が出土し、纏向が当時の日本列島の大部分を統括する交流センター的な役割を果たしたことがうかがえること。

・卑弥呼の遣使との関係を窺わせる景初三年（239年）、正始元年（240年）銘を持つものもある三角縁神獣鏡が畿内を中心に分布していること。

・弥生時代から古墳時代にかけておよそ4,000枚の鏡が出土するが、そのうち紀年鏡13枚のうち魏の年号を記した10枚は235年-244年の間に収まって銘されており、そのうちの5枚が畿内に分布していること。この時期の畿内勢力が中国の年号と接しうる勢力であったことを物語ると考える。

・『随書』では、都する場所邪摩堆を「魏志に謂うところの邪馬臺なるものなり」と何の疑問もなく同一視していること。

・近畿は南に無いが、現存する「魏志」はすべて宋時代(1127~1279年間の南宋)の刊行本(現存する最古の版本は紹興本)を元としているので、それ以前の写本の中に、南を東と記載したものがある可能性。(現在の方角とは差異があり、魏使は天文学者ではないので、方角を測量する知識も手段もなかった。太陽の軌道で見極めようとしていたのであろうが、四季によっても変わるので補正できたのだろうか？誤認は充分考えられる。10数世紀になっても中国の地図に日本が南北の列島と書かれている事例がある。諸説のひとつかもしれないが。北九州が半島に最も近くにあり、そこから遠ざかる方に移動する。いずれにしても列島の方角を誤認していた可能性がある)

4-4) 畿内説の弱点

・魏に朝貢したからと言って、邪馬台国が日本列島最大勢力であったとは限らないこと。さらに纏向遺跡からは九州地方の遺物の出土も乏しく、大陸系の遺物は全くといってよいほど発見されていないこと。

・纏向遺跡の年代の問題から卑弥呼治世時の遺跡とする見解に対する批判があり、上記説に伴って邪馬台国と大和の二朝並立説や、王朝とまではいえなくとも邪馬台国とは別の地方勢力があったと考えられること。(放射線炭素14年代測定法により、3世紀に建造される建物の柱の穴が多数検出されている)

・「魏志倭人伝」の記述は北九州の小国を詳細に紹介する一方で、畿内説が投馬国に比定する近畿以西に存在したはずの吉備国や出雲国の仔細には全く触れられておらず、近畿圏まで含む道程の記述とみなすのは不自然。(しかし、例えば中国は出雲のことを投馬国と名前を付けていた可能性があるろう)

・「魏志倭人伝」を読む限り、邪馬台国は伊都国や奴国といった北部九州の国より南側にあること。また、記紀には元伊都国王や元奴国王が北部九州征伐に行った仲哀天皇(第14代、在位期間不明)に降伏して、玉や剣など先祖伝来の神器を仲哀天皇に差し出したとの記述があること。ただし、これらの記紀の記述の信憑性は非常に低い。(女王国の以北に伊都国等があると書かれているが、方角を誤認していたのであれば、以北→以西となり、合致していることになる。)

・『旧唐書』では邪馬台国と日本国を別国として扱っていること。

・奈良盆地には墓制や金属器(青銅器・鉄器)の入手・生産、対外交流などにおいて北部九州を超えるような内容を認められない。

かつて、畿内説の重要な根拠とされていた説は以下である。

・三角縁神獣鏡を卑弥呼が魏皇帝から賜った100枚の鏡であるとする説 - しかし、既に見つかったものだけでも400-500面以上になること、中国や朝鮮半島から1面も出土例がないこと、製造時期の長さから特鑄説(倭国向けに特別に鑄造された)には無理があること、王仲殊など中国の学者が概ね日本鏡説を支持したことなどから、九州説の側から「三角縁神獣鏡は全て日本製」との反論を受けた。

・邪馬台国長官の伊支馬(いきま?)と垂仁天皇の名「いくめ」の近似性を指摘する説 - 大和朝廷の史書である記紀には、卑弥呼の遣使のこと等具体的に書かれていない。田道間守の常世への旅の伝説を、遣使にあてる説もある。(記紀の編者は中国の史料に精通しながら、あえて卑弥呼や倭の五王に関連することを記述していないし卑弥呼や倭五王(わのごおう、中国南朝の宋の正史『宋書』(513年ごろ完成)に登場する倭国の5代の王、讃・珍・済・興・武をいう)に関する話題を避けているようだ。実際には王権の交代があったかも知れないのだが、8世紀になって王権維持のために万世一系を標榜した大和朝廷は、そのことを悟られるようなことを記紀の中で一切触れなくなかったのかもしれない?)

5. さいごに

数年前にM教授の魏志倭人伝を含む歴史書を読んだことがあります。その中でもっと知りたいと思っていた頃ですが、団地内を散歩していたとき、たまたまM教授の名前の表札を見つけました。以前その奥さんと同じ時期に自治会役員として活動していたことがあり、そのときにご主人が大学の教授と誰かに聞いたことを思い出しました。思い切って訪問したら、同姓同名の他人ではなくM教授でした。私と同年で、すでに退任されていると分かりました。疑問について回答してもらった後で「丁度本を処分するところだったので、魏史倭人伝の興味をお持ちならその関係の書籍をさしあげますよ」との申し出を戴いたので、お願いしたところ、それが段ボール3箱分だったので驚いたことがあります。必要のないものは処分してもらって結構ですと。聞けば「卑弥呼の時代はいくら研究しても結論が出ないので、ヤマト王権を専門にしている」とのことでした。折角だからと思い、読み始めましたが、九州説論者の方は先に結論ありきで、それに合致しないものは読み替えるとか記述を無視してしまうので、文献史学や歴史学とも思えなくなってしまい、頭がおかしくなり、結局読むのを止めて大半の本を処分してしまいました。関口宏の歴史番組の中で、ある専門家が「自分は畿内説論者だが、もし今後卑弥呼が魏から授けられたとされる金印が畿内で発掘されても、九州説論者の中には、「それは元々九州にあったものが、その後畿内に移動されたものである」と主張する方がいるでしょう。卑弥呼が授かったとされる銅鏡もしかりで発掘されても結論はなかなか出ないでしょう」と。それを拝聴し、ある程度はM教授に頂いた図書を読んでいたので「やはりそうか」と合点がいったことがあります。卑弥呼の墓候補の古墳が発掘されることにより、殉教者100余人の人骨または痕跡が見つければ決定的でしょう。また種々の発掘物により卑弥呼の墓と特定されるまで、邪馬台国論争はおさまらないでしょう。そして最終結論が出るまで今後も新たな説が出て来るものと思われます。

参考資料

- ・丸山雍成著；『邪馬台国魏使が歩いた道』
- ・邪馬台国探検隊；『邪馬台国への旅』
- ・石野博信著；『邪馬台国の考古学』
- ・ウィキペディア

以上